七週間の札幌【7】

競馬を題材とした作品を手掛けている早見和真さんに、札幌競馬を舞台としたエッセイを執筆頂きました。
2回札幌競馬ではクリアファイルを制作しプレゼントを予定しています。

そして継承される

長く、短く、そして熱かった札幌競馬場の七週間が、今週ついに幕を閉じる。

むろん競馬は来週以降も続くけれど、函館から始まった北海道開催の競馬は、日曜日の第12レース、2勝クラスのダート1700メートル戦をもって終了する。

一年でたった七週間しか使用されない場所。
日数にしてわずか十四日間の競馬開催。
空白の期間がひたすら長く、他に類を見ないような贅沢さで、
だからこそきっと密度の濃い、尊い時間が生み出される。

その開幕週、本コラムの一回目の原稿で僕はこんなことを書いた。
「すべての馬たちに、その背後の人間たちに
たくさんの物語があることを忘れずに、またこの夏を見守りたい」

今年もたくさんのドラマがこの地で生まれた。

いい思いをした人もいただろうが、その数倍、数十倍の、悔しい思い、悲しい思い、あるいはさみしい思いをした人もいたかもしれない。

それでも、やはり競馬は続くのだ。
馬も、人も、百円の馬券に何かを賭したファンだって、最後の最後に勝てばいい。
それまではすべて過程だ。最後に笑えばいいだけだ。

秋以降の主役たちは、この七週間のどこかにいたはずだ。

札幌から始まる次なる物語を楽しみに待ちたい。

文:早見和真

1977年神奈川県生まれ。『イノセント・デイズ』で日本推理作家協会賞、『ザ・ロイヤルファミリー』で山本周五郎賞、JRA賞馬事文化賞をW受賞。『店長がバカ過ぎて』で20年本屋大賞9位。初のノンフィクション『あの夏の正解』は21年Yahoo!ニュース本屋大賞ノンフィクション本大賞にノミネート。最新作は『八月の母』。

画:倉橋寛之

1972年北海道生まれ。札幌を中心にアートディレクター、イラストレーターとしてデザイン・広告業に従事。2009年TOKYO ADC(東京アートディレクターズクラブ)ADC賞受賞。現在、株式会社9Bデザイン代表。